

令和6年度 分担研究報告書
ドナーミルクを使用した赤ちゃんのご家族の感情の抽出

研究分担者 新藤 潤 地方独立行政法人東京都立病院機構 東京都立小児総合医療センター
新生児科 医長

研究要旨

我が国において2017年に日本母乳バンク協会が設立され安定的なドナーミルクの提供体制の構築が進められていることを鑑み、2019年に日本小児医療保健協議会栄養委員会より発表された「早産・極低出生体重児の経腸栄養に関する提言」において、自母乳が得られない場合または使用できない場合の栄養の第一選択は母乳バンクから提供されるドナーミルクであると明言された。しかしながら、ドナーミルク利用施設数、利用患者数ともに年毎に着実に増加しているものの、母乳バンクおよびドナーミルクの認知度はまだ高いとは言えず、母親たちは「自分の母乳で育てたい気持ち」と「児にとって最善の治療」の間で葛藤を感じている。母乳バンクの調査により、母親の過半数がドナーミルクの利用に抵抗を感じている一方で、母乳バンクに対する理解度が高いほど抵抗感が低いことが明らかになっている。母親とその家族が母乳バンクおよびドナーミルクに対する正確な情報を得ることが、当事者となった際に安心してドナーミルクを利用することにつながり、ひいては母親自身の母乳分泌の確立を促すことに通じる。また、父親をはじめ家族の理解も母親の心理を支える重要な役割を担うと考えられる。

本研究ではまず前年度から本年度にかけて、親たちがドナーミルクの利用で実際に感じた葛藤、懸念点、改善点などを調査するためのアンケート調査を実施した。本年度はその結果を集計し、母乳バンクとドナーミルクに対する母親・父親それぞれの理解・葛藤・課題・希望を抽出し、親たちがより安心してドナーミルクを利用しうるためのパンフレットを作成する資料とした。本研究によりドナーミルクの利用と母乳育児支援が促進され、極低出生体重児の予後が改善することが期待される。

A.研究目的

早産児、特に極低出生体重児や消化管疾患・心疾患があるハイリスク新生児にとって経腸栄養の第一選択は児の母の母乳（以下「自母乳」）であるが、自母乳が得られない場合、または使用できない場合の第一選択として、ドナーミルク（以下「DHM」）を使用すべきとされている^{1,2,3)}。我が国においても2017年に日本母乳バンク協会が設立され安定的なDHMの提供体制の構築が進められていることを鑑み、2019年に日本小児医療保健協議会（日本小児科学会、日本小児保健協会、日本小児科医会、日本小児期外科系関連学会協議会）栄養委員会より発表された「早産・極低出生体重児の経腸栄養に関する提言」⁴⁾において、自母乳が得られない場合、または使用できない場合の第一選択として、母乳バンクで適切に安全管理されたDHMを使用すべ

きと明言された。2023年度末のドナーミルク利用施設数は95施設、利用患者数は1118名と着実に増加しているが、母乳バンクおよびDHMの認知度は20%台とまだ高いとはいえない⁵⁾。そして、DHMを使用した児（以下「レシピエント」）の母親たちは「自分の母乳で育てたい気持ち」と「児にとって最善の治療」の間で葛藤を感じていることが国内外の研究で報告されている⁶⁻⁹⁾。さらに、2024年の日本母乳バンク協会の調査⁵⁾では、「DHMの利用を提案されたらどう思うか」の質問に妊婦・褥婦の55%が「抵抗を感じる」と答えている。そしてDHMに抵抗を感じる理由は多い順に、自分以外の母乳を与えることに抵抗がある、DHMに安全上の不安がある、DHMの利点が分からない、等であり、母乳バンクに対する理解度が高いほどDHMに対する抵抗感が低いことが明らかになった。先行

研究¹⁰⁻¹²⁾でも母親たちの感じる DHM の懸念点は同様であり、妊婦および妊娠可能な女性とその家族が母乳バンクおよび DHM に対する正確な情報を得ることが、当事者となった際に安心して DHM を利用することにつながると考えられる¹³⁾。

そこで、レシピエント家族が安心して DHM を使用できるようにするためには、妊婦および妊娠可能な女性とその家族に対して母乳バンクおよび DHM に対する正確な情報を伝えることが重要であると考えられることから、そのような内容を盛り込んだ冊子を作成することを本研究の目的とした。日本人の感情は海外の先行研究と異なる可能性があること、父親の感情を調査した研究は存在しないことから、本研究では日本人の母親と父親を対象としてアンケート調査を行った。さらに、国内での先行研究⁷⁾は 3 施設のレシピエントの母親のみを対象とした小規模な調査であったため、より正確なニーズを把握するために調査対象を全国に拡大した。レシピエントの母親および父親たちが実際に感じた葛藤、懸念点、改善点などを分析し、レシピエント家族向けの冊子を作成したい。

B.研究方法

「早産・極低出生体重児の経腸栄養に関する提言」の出された 2019 年 7 月以降に日本母乳バンク協会あるいは日本財団母乳バンクから提供された DHM を使用した児の母親および父親を対象とした。本研究について文書で説明を実施し、十分な理解の上、本人の自由意思によりアンケートへの回答を依頼した。アンケート内の同意欄への記入をもって研究参加への同意とした。

対象者へは日本母乳バンク協会および日本財団母乳バンクの会員 95 施設を通じて研究参加を依頼した。アンケートへの回答は無記名でインターネット上の回答フォームに記入する方式とした。調査期間は 2024 年 3 月 11 日から 2024 年 6 月 30 日としたが、その後も入力があったため 2024 年 9 月 30 日までに得られた回答を分析した。

アンケート内容（別添 1 および 2）は先行研究⁶⁾の調査内容を基礎に、東京都立小児総合医療センター心理福祉科に所属する臨床心理士・公認心理師の助言を加味し決定した。昨年度の

報告書に記載したものから変更はない。

本研究は東京都立小児総合医療センターの研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（倫理委員会番号 2023b-164）。

C.研究結果

1) 回答者の背景

日本母乳バンク協会および日本財団母乳バンクの会員 95 施設のうち 48 施設（51%）（別添 3）から協力の同意が得られた。そのうちの 37 施設（39%）のレシピエント家族から回答を得た。回答数は母親 169 名、父親 74 名の計 243 名である（DHM を使用しなかった母親・父親の各 1 名を除く）。母親は初産婦が 42%、経産婦が 58%だった。

1-1) 回答者の居住地（別添 4：図 1）

北は青森県から南は沖縄県まで、25 都府県に分布していた。東京都、愛知県、千葉県、岐阜県の居住者からの回答が多く、中国・四国・九州地方の居住者からの回答は少なかった。

1-2) 回答者の児の背景（別添 4：図 2）

2020 年から 2024 年まで各年で出生したレシピエント家族から回答があり、2020 年 6 名（母親 4 名、父親 2 名）、2021 年 21 名（同 17 名、5 名）、2022 年 44 名（同 33 名、11 名）、2023 年 106 名（同 72 名、34 名）、2024 年 65 名（同 43 名、22 名）であった。双胎 19 組、品胎 4 組を含む。

レシピエントの在胎週数（母親の出産週数）は 22 週から 35 週の全ての週と 37 週であり、23 週から 33 週にかけて概ね均等に分布していた。

レシピエントの出生体重は 500g 未満から 1500g 以上のすべてのカテゴリーに分布し、500～1499g が双胎 27 組、品胎 8 組を含む 286 名中 268 名（94%）だった。1500g 以上で出生した 14 名はいずれも在胎 34 週未満の早産児だった。

2) DHM と母乳バンクの認知度（別添 4：図 3）

医療スタッフからの説明前に DHM と母乳バンクについて知っていた割合は、全体では母親で 18%、父親で 8%だった。年別では 2021 年の母親 6%・父親 0%、2022 年同 18%・9%、2023 年同 22%・15%、2024 年同 14%・0%だった。

3) DHM の説明の時期（別添 4：図 4）

DHM の説明を聞いた時期は、母親の 75%、父

親の77%が出産後であり、出産4日目以降も6%前後あった。一方、実際に説明を聞きたかった時期は、母親の67%、父親の57%が出産前（妊婦健診時・切迫早産での入院時）と回答した。

4) 説明を両親一緒に聞いたか（別添4：図5）

母親の回答では、両親ともに説明を聞いた割合は79%、母親のみが15%、父親のみが3.6%だった。父親の回答では、両親ともに説明を聞いた割合は93%、母親のみが2.7%、父親のみが2.7%だった。

5) 母乳バンクからの家族向け冊子「ちいさく生まれた赤ちゃんのためのドナーミルクを知っていますか？」¹⁴⁾の利用率（別添4：図6）

DHMの説明を受けた際に家族向け冊子を読んだ母親は59%、父親は65%だった。DHMのメリットがよく分かった、わかりやすくまとまっていた、赤ちゃんに飲ませていいものだと分かり安心した、体験談が励みになった、というポジティブな感想が大部分だったが、うまく成長するか分からず先輩ママの言葉を素直に受け入れられなかった、という感想もあった。

6) 早産児における母乳の利点について知っていたこと（別添4：図7）

両親ともに、「感染症を減らす」が70%前後、「成長・発達がよい」が60%前後で上位だった。「消化が良いので点滴を早くやめられる」「壊死性腸炎を減らす」が20%前後、「慢性肺疾患を減らす」「未熟児網膜症を減らす」は10%以下だった。「どれも知らない」が母親の14%、父親の18%を占めた。

7) DHMの説明を聞いて安心できたこと（別添4：図8）

「DHMにより病気から守ることができる」（母親75%、父親66%）、「母親の母乳分泌に時間がかかっても大丈夫」（母親57%、父親69%）が上位2項目。以下、「DHMの理解ができて不安が減った」（母親46%、父親45%）、「DHMはあくまでつなぎで自母乳が最善と分かった」（母親29%、父親41%）、「母親の体調が不安だったが母乳に関する不安が減った」（母親24%、父親42%）、「世界標準の最善の治療を受けさせられる」（母親22%、父親30%）、「異なる出産施設だったので母乳を届けられない不安が減った」（母親14%、父親12%）、「母親の病気のために母乳を与えられないと思っていたので安心し

た」（母親8%、父親16%）、の順だった。「母親の体調が不安だったが母乳に関する不安が減った」と「母親の病気のために母乳を与えられないと思っていたので安心した」の2項目は父親の回答率が有意に高かった。

8) DHM使用にあたっての不安（別添4：図9）

母親の36%、父親の61%が「不安や葛藤なし」と回答した。「最初に与えるのは自母乳が良かった」（母親26%、父親7%）、「感染症や品質の管理」（母親24%、父親16%）、「誰の母乳か分からない」（母親23%、父親14%）、「母親の母乳分泌」（母親16%、父親11%）、「自母乳だけで育てたかった」（母親12%、父親5%）、「金銭面」（母親11%、父親18%）だった。「金銭面」のみ父親のほうが高かったが、そのほかはいずれも母親のほうが回答率が高かった。

9) DHMの使用に同意した理由（別添4：図10）

母親・父親ともに「病気から守ることができる」が最多（母親80%、父親68%）で、以下「母親の母乳がすぐに十分に出るかわからなかった」（母親54%、父親47%）、「スタッフを信頼できた」（母親37%、父親53%）、「ほかに選択肢がない」（母親31%、父親28%）、「最善の治療を受けさせたい」（母親23%、父親23%）、「他人の母乳というよりも『薬』だと思う」（母親11%、父親11%）、「無料」（母親6%、父親8%）、「母親の病気のため」（母親5%、父親7%）、「母親の体調が楽になる」（母親2%、父親31%）が続いた。「病気から守ることができる」は母親が、「スタッフを信頼」と「母親の体調が楽になる」は父親が有意に回答率が高かった。「同意しなかった」の回答者はいなかった。

10) DHMの使用に当たっての希望（別添4：図11）

母親・父親ともに「特に希望なし」が最多（母親45%、父親61%）で、以下「可能な限り早く使用してほしい」（母親35%、父親30%）、「少しでも自母乳が入ってから使ってほしい」（母親16%、父親11%）、「できるだけ少なくしてほしい」（母親7%、父親8%）、「ドナーの数は少ないほうがいい」（母親4%、父親5%）の順。

11) DHM使用後の説明内容（別添4：図12）

DHM使用後の説明は母親の86%、父親の89%が受けていた。説明の内容は「いつから使ったか」（母親66%、父親78%）、「いつまで使ったか」（母親35%、父親78%）が上位2項目で、以下

「使用量」(母親 0%、父親 27%)、「よかったこと」(母親 20%、父親 7%)、「悪いことが起こらなかったこと」(母親 16%、父親 16%)で、母親の 17%・父親の 11%が「説明なし」と回答した。

12) DHM を使用してよかったか(別添 4: 図 13)

振り返ってみて DHM を使用してよかった・必要だったと思うかの問いには「非常にそう思う」(母親 81%、父親 69%)、「ややそう思う」(母親 17%、父親 22%)が約 90%を占めた。「どちらともいえない」は母親 2.4%、父親 9.5%。「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の回答はなかった。

DHM を使用してよかったと思う理由の自由記載の内容は、【母親】母乳がすぐに出なかった、または量が足りなかったため(79 件)、赤ちゃんの健康や成長に良い影響があったため(無事に退院、元気に成長など)(58 件)、壊死性腸炎などのリスク軽減に役立ったと感じたため(27 件)、消化しやすく、赤ちゃんの負担が少なかったため(25 件)、低体重や早産児に最適な栄養と聞いたため(22 件)、母乳をすぐに与えられない際のつなぎとして使えたため(21 件)、DHM があったことで母親が精神的に安心できたため(18 件)、免疫面のサポートを考慮して(13 件)、NICU での DHM 制度への感謝(10 件)、感染症などのリスクが軽減されたと感じたため(9 件)。**【父親】**母乳がすぐに出ない、または量が不足したため助けになったため(26 件)、早産児や体調が未熟な赤ちゃんへのサポートとして有効だったと感じたため(16 件)、赤ちゃんが元気に成長し、無事に退院できたため(15 件)、母親の負担や心理的な不安を軽減できたため(9 件)、母乳の免疫効果や消化の良さを評価(8 件)、安心感を得られたため(7 件)、人工乳よりも健康的であると考えたため(5 件)、母乳の効果を信じ、赤ちゃんにとって最善と判断できたため(4 件)、選択肢がなかった状況で必要だったため(4 件)、早産や病気などのリスク管理の観点で有用と感じたため(3 件)、結果的に良かったが、使用量や具体的な効果が不明だった(3 件)。

13) DHM 使用後に残っている心配(別添 4: 図 14)

母親の 93%・父親の 95%は「心配は残っていない」と回答した。母親の 6%・父親 5%が「心配あり」と回答しており、その内容の半数は

「感染症」だった。「感染症」「何らかの影響」と回答した 7 名のうち 5 名は DHM 説明用の冊子¹⁴⁾を使用されていなかった。

14) 出産前と DHM 使用後の母親の母乳育児に対する考え(別添 4: 図 15)

「絶対に母乳のみで育てたい」(出産前 3.0%、退院後 7.7%)、「できれば母乳で育てたい」(出産前 43%、退院後 38%)、「母乳のみでなくても構わない」(出産前 53%、退院後 53%)、「人工乳のみで育てたい」(出産前 0.6%、退院後 1.8%)と大きな変化を認めなかった。

15) 母親および父親から後輩のレシピエント家族・医療従事者へのメッセージ

自由記載してもらった意見を別添 5(母親)および別添 6(父親)に示す。同様な意見は割愛した。

D. 考察

1) 回答者の背景

DHM 利用施設(日本母乳バンク協会および日本財団母乳バンクの会員施設)95 施設のうち 25 都府県・37 施設(39%)のレシピエント家族の協力が得られており、我が国のレシピエント家族の全体像を概ね反映していると考えられる。

レシピエントの誕生年は 2020~2024 年に分布し経時的に増加(2024 年は 6 月までだが 2023 年の半分以上)しており、DHM の利用拡大の傾向と一致していた。2019 年に「早産・極低出生体重児の経腸栄養に関する提言」の出された直後から最近まで様々な時期の親の思いが得られたと考えられる。

回答者(母親)の分娩週数は 22~37 週に亘り、23~33 週の各週ではほぼ均等に分布していること、出産した児の出生体重は 500~1499g が大部分を占めおよそ均等に分布していること、回答者(母親)の出産経験は初産が 42%、経産が 58%であることから、妊娠期間・児の出生体重・過去の出産経験の有無など多様な背景の母親の感情を抽出できたと考えられる。

2) DHM の使用前の説明

母乳バンクの調査⁵⁾で、DHM の理解が深いほど葛藤が少ないことが示されているが、レシピエント家族においてさえ DHM の認知度は 20%以下と低く、パンフレットの利用率も半分程度

だった。パンフレットの使用により母親・父親ともに45%が「DHMのことが理解でき不安がなくなった/減った」と回答し、すべての親が何らかの安心材料を得ていたことから、親の葛藤を減らすためにパンフレットの使用が効果的であることが裏付けられた。自由意見では、母乳バンクとDHMの使用が当たり前の制度になることが葛藤を減らすために必要との意見が象徴的であり、今後の体制整備が急がれる。

他人の母乳(DHM)が使用されることに葛藤を感じるのは父親よりも母親のほうが有意に多い結果だった(最初に与えるのは自母乳がよい:母26% vs 父6.8%、不安や葛藤なし:母36% vs 父61%、そのほかの項目は有意差がないものの全て母親のほうが高率だった)にもかかわらず、母親の3%がDHMの説明を聞いていなかった。母乳という特性のみならず、今回の結果から母親のほうが葛藤が強いことが明らかとなっており、母親への説明は必須である。出産後の説明でパンフレットを読んだ母親の1名から「体験談がづらい」という意見があった。産後の精神的にも身体的にも不安定な時期を避け、かつ判断するための十分な時間を得るためにも、出産前の比較的落ち着いた環境で両親(少なくとも母親)に説明することが望ましいと考えられた。

DHM使用後に不安が残ると回答した親の大部分はパンフレットを読んでおらず、主たる不安内容である感染症はパンフレットに記載されている内容だった。母乳バンクの体制・ドナーの選定・DHMの衛生管理を的確にレシピエント家族に説明するために、現行のパンフレットを積極的に活用するとともに、より分かりやすく受け入れられやすいパンフレットを作成する必要がある。極低出生体重児における母乳・DHMの具体的な利点も知られていなかったため、新しいパンフレットでは早期母乳栄養が合併症の予防・発達予後改善に寄与することとともに自母乳が最善であることを明記することが必要であると考えられた。

3) DHMの使用

DHMの使用に同意した理由は母父ともに「DHMの使用で児を病気から守れる」(母80%、父68%)が第1位であり、児の体調・予後の改善が最も期待されていた。母の第2位、父の第3位は「自母乳がすぐに出るか分からない」(母

54%、父47%)であり、自母乳が出るまでのつなぎとしてのDHMの役割が期待されていた。DHMの使用に当たっての希望は「特になし」が母45%、父61%と最多で、児のために最善の治療を提供してほしいという思いが伺われた。DHMの使用開始に当たっては、児のために「可能な限り早く開始してほしい」(母35%、父30%)と思いつつ「可能なら自母乳を最初に与えてほしい」(母16%、父11%)という思いがあった。実臨床では母に十分な搾乳支援を行うことにより数滴の初乳を得ることは可能であり、これを口腔内塗布してからでもDHMの開始時期が遅れることは避けられると思われる。母親への精神的なサポートがDHMに対する葛藤を低減しうる。

DHMの使用により「母親の体調が楽になる」との考えは母では最下位(1.8%)、父では第4位(31%)で有意差を認めた。母親は自身の体調よりも児の体調を心配していたが、父親は児だけでなく母親の体調を気遣っていることが明らかになった。父親への説明ではこの点を強調することも、父の葛藤を低減させるうえで有意義であると考えられた。

4) DHMの使用後の説明

DHM使用後の説明は9割弱で受けていた。実際に使用した期間についての説明は受けていたが、実際に聞いたかった内容は「使用期間」「使用量」「使用したメリット」「デメリットがなかったこと」がいずれも同程度で両親ともに30-45%であった。使用後にも感染症などの不安を感じる親が5%程度いたことから、先行研究⁶⁾でも述べられていた「悪いことが起こらなかったこと」を説明することは、使用後の不安軽減に重要であると考えられた。

5) DHM使用後の感想

「DHMを使用してよかったか/必要だったと思うか」の質問に対し「全くそう思わない」「あまりそう思わない」の回答は母父ともにおらず、「非常にそう思う」(母81%、父69%)、「ややそう思う」(同17%、22%)が合わせて母の98%、父の90%を占めた。母の2.4%、父の10%「どちらともいえない」と回答しており、その内容は「病院の説明を信頼したがDHM以外の選択肢がなかったか」「使わざるを得ない状況だったから」「感染症の心配がまだ残るから」「最初の説明以外に説明がなかったから分からない」と

いったものであった。DHM 使用前・中・後を通して親の気持ちに寄り添い説明することの重要性が再認識された。

6) 母乳育児に対する母親の気持ち

出産前と DHM 使用後の母乳育児に対する母親の気持ちは、「絶対に母乳で育てたい」が出産前 3.0%、DHM 使用后 7.7%と増加していたが、

「絶対に母乳」と「できれば母乳」の合計は出産前・DHM 使用后とも 46%で変化がなかった。

「混合栄養」の希望も出産前・DHM 使用后とも 53%と変化がなかった。この比率は厚生労働省による「平成 27 年度乳幼児栄養調査結果」¹⁵⁾

での「母乳育児に関する妊娠中の考え」と同様であり、一見すると DHM 使用后でも母乳育児への動機づけは得られていないように見える。しかしながら、今回の調査では退院後の回答者が 75%を占めていることと、児が入院中の回答者でも自身の母乳分泌量が確立した時点での回答であることから、純粋な希望ではなく、現状を加味した「考え」となっているものと考えられる。早産の母親での母乳分泌確立には十分かつ適切な搾乳支援が必要であるため、より一層の母乳分泌支援を提供することが望まれる。

「早産・極低出生体重児の経腸栄養に関する提言」⁴⁾にあるように、「十分な支援によっても母乳が得られない、児に与えられない場合にはドナーミルクを用いる」という原則を忘れてはならない。

7) DHM 使用に対する葛藤の低減のために

レシピエント家族が自由記載した DHM 使用における葛藤の低減のための提案を要約した。

1. DHM の安全性確保と説明の充実

a. 安全性の透明化：ドナーの選定基準や健康チェック、母乳の検査フローをパンフレットやポスターで明確に伝え、感染症や衛生面での懸念がないことを周知する。

b. 医療者からの丁寧な説明：DHM の安全性や利点（回避できる合併症）を丁寧に説明し、親が安心して判断できるよう支援する。

c. 使用実績の公表：DHM 使用例やその効果に関するデータを共有し、信頼性を高める。

2. 事前の周知と情報提供機会の拡大

a. 妊娠初期からの情報提供：妊婦健診や母子手帳の受け取り時に DHM の情報を提供し、早産や緊急時に備えて事前に理解を深める機会を設ける。

b. 広報活動の強化：産婦人科や関連施設にポスターやパンフレットを配置し、DHM に関する正確な情報を広める。

3. 利用者の体験談共有と社会的認知向上

a. 体験談の共有：レシピエントの親たちの声を発信し、具体的な事例を通じて DHM の価値を伝える。

b. SNS やインターネットでの情報発信：体験談をウェブや SNS で公開し、信頼できる情報源として広める。誤った情報が広まらないよう、公的機関からの情報発信を推進する。

4. 葛藤の軽減とサポート体制の強化

a. DHM に対する誤解の解消：他人の母乳に対する不安や、母親としての自己価値に関する心理的負担を軽減するため、科学的根拠に基づいた説明や、心理的なサポートを充実させる。

b. パートナーの役割：サポート役としての役割を明確にすることで、母親が抱える葛藤を軽減する。家族全体の理解と協力が母親の負担を軽減する。

c. 相談窓口の設置：不安や疑問を持つ親が気軽に相談できる窓口を設け、適切なアドバイスを受けられる体制を整える。

5. 認知度向上と制度の強化

a. 海外事例の紹介：DHM の使用が進んでいる海外の事例を紹介し、国内でも必要性和認知度の向上を図る。

b. 制度化の推進：DHM が標準治療として定着し、すべての親が安心して利用できるよう制度づくりを進める。

E. 結論

過去 4 年間に DHM を使用した児の両親に対して DHM に対する不安・懸念・要望を調査した。本研究の結果をもとに、患者家族および医療従事者向けの冊子を作成し、きめ細やかな情報提供と意思決定の支援を行っていく予定である。

【参考文献】

- 1) Arslanoglu S, Corpeleijn W, Moro G, et al. ESPGHAN Committee on Nutrition. Donor human milk for preterm infants: current evidence and research directions. J Pediatr Gastroenterol Nutr 2013; 57: 535-542
- 2) Committee on Nutrition, American

Academy of Pediatrics. Policy Statement: Donor Human Milk for the high-risk infants: preparation, safety, and usage options in the United States. Pediatrics 2017; 139: e20163440

3) Meek JY, Noble L. Policy Statement: Breastfeeding and the Use of Human Milk. Pediatrics 2022; 150(1): e2022057988.

4) 日本小児医療保険協議会栄養委員会. 早産・極低出生体重児の経腸栄養に関する提言, 日児会誌 2019; 123(7): 1108-1111

5) ピジョン株式会社. 母乳バンク「言葉も内容も知っている」割合は約 3 割と横ばいが続く. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000173.000048454.html> (2024-10-1)

6) Esquerra-Zwiers A, Rossman B, Meier P, et al. "It's Somebody Else's Milk": Unraveling the Tension in Mothers of Preterm Infants Who Provide Consent for Pasteurized Donor Human Milk. J Hum Lact 2016; 32(1): 95-102

7) 谷有貴, 内田優美子 釜本智之ら. ドナーミルクを使用した母親へのアンケート調査. 日本新生児成育医学会雑誌 2022; 34(3): 428

8) Brown A, Shenker N. Receiving screened donor human milk for their infant supports parental wellbeing: a mixed-methods study. BMC Pregnancy Childbirth 2022; 22(1): 455

9) Loh HF, Lee JR, Tan AR, et al. Emotional journey of Asian mothers of premature infants who received pasteurised donor human milk: a qualitative study. Arch Dis Child Fetal Neonatal Ed 2023; 108(4): 348-353

10) Rabinowitz MR, Kair LR, Sipsma HL, et al. Human Donor Milk or Formula: A Qualitative Study of Maternal Perspectives on Supplementation. Breastfeed Med 2018; 13(3): 195-203

11) Kair LR, Flaherman VJ. Donor Milk or Formula: A Qualitative Study of Postpartum Mothers of Healthy Newborns. J Hum Lact 2017; 33(4): 710-6

12) McCloskey RJ, Karandikar S. Peer-to-Peer Human Milk Sharing: Recipient Mothers' Motivations, Stress, and

Postpartum Mental Health. Breastfeed Med 2019; 14(2): 88-97

13) Schafer EJ, Ashida S, Palmquist AEL. Psychosocial dimensions of human milk sharing. Matern Child Nutr 2018; 14(6): e12606

14) 日本母乳バンク協会, 日本財団母乳バンク、ちいさく生まれた赤ちゃんのためのドナーミルクを知っていますか? . 2022 https://milkbank.or.jp/wp-content/uploads/2022/06/HumanMilkBank_DonorMilkBook_2022.pdf (参照 2025-3-7)

15) 厚生労働省. 乳幼児の栄養方法や食事に関する状況, In: 平成 27 年度乳幼児栄養調査結果の概要.

[https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000134460.pdf)

[Koyoukintoujidoukateikyoku/0000134460.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000134460.pdf) (参照 2025-4-6)

F.健康危険情報

なし。

G.研究発表

1. 論文発表

(投稿準備中)

2. 学会発表

新藤潤ら. ドナーミルクを使用した児の親の思い～全国アンケート調査～. 第 68 回 日本新生児成育医学会・学術集会, 松本, 2024.

H.知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし。

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。